

# 中島敦『蕨・竹・老人』と『巡査の居る風景』考察

— 二編の関連性を中心に —

陳愛華\*

---

## 目次

---

1. 問題の所在と本論の目的
  2. <一九二三年>という遠近法<sup>パースペクティブ</sup>
  3. 周縁化とく中心志向
  4. 南方への願望
  5. 結 び
- 

## 1. 問題の所在と本論の目的

中島敦の初期作品<sup>1)</sup>に関しては、これまで植民地の表象および他者認識の問題に注目した研究が大半を占めている<sup>1)</sup>。ポストコロニアリズム研究が盛んな中、朝鮮、満州での体験を生かした作品<sup>2)</sup>に論者たちの関心が集まるのは当然なこととも言える。しかし、處女

\* 広島大学 大学院 日本近代文学

- 1) 中島の場合、先行研究を見れば、1934年の『虎狩』を初期と中期の境と見る意見が多い。本稿もそれに従う。
- 1) 例えば、浦田和義氏は『巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ』と『D市七月絃景(一)』について、作者が「現実を直視し、植民地『朝鮮』『満州』を舞台にして、積極的に民族差別、階級差別を問題にする地点まで踏みだし」たと捉えている(「中島敦の<虚構>—太宰治を視座として」、勝又浩・木村一信誌編『昭和作家のクロノトポス』所収、双文社出版、1992年11月)。また、天野眞美氏は中島の初期作品について、「『植民地』を『混淆』する場=『境界』として捉える」これらの作品には、「隠蔽された共同体の幻想性を露呈させるものがある」と論じた(「中島敦論—『境界』としての『植民地』—」、『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊2号、1994年3月)。ほかにも、「浮遊する朝鮮人の造形は、的確な朝鮮認識に基づいたもの」と評価した南富鎮氏の論(「中島敦の初期と朝鮮—その浮遊する朝鮮人像—」、『稿本近代文学』第20巻、1995年11月)や、「植民地作家」中島の「出発点と言える」作品として『巡査の居る風景』を位置つけた李英哲氏の論(「中島敦『巡査の居る風景』——一九二三年の一つのスケッチ』について」、『日本文学論叢』第28号、1999年3月)などが挙げられる。
- 2) 主には、1929年の『巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ』、1930年の『D市七月絃景(一)』、

作の『下田の女』<sup>3)</sup>が日本を舞台にしているように、初期の中島の関心は植民地にのみあるのではなかった。六年間の朝鮮滞在<sup>4)</sup>を終えて<sup>3)</sup>帰国した中島にとって、久しぶりに見る日本の風景には彼の心を動かすものがあったと思われる。植民地ものの創作に並行して、いくつか日本を舞台にした作品<sup>5)</sup>を執筆したのはその現われであると考えられる。つまり、初期作品において中島はアジアの植民地だけではなく、日本という空間をも視野に入れていたのである。それは当時の人々の空間認識に沿って言えば、アジアの広い地域を包摂しようとしていた「帝國日本」を「外地」と「内地」<sup>4)</sup>の両面から捉える姿勢だったと言えよう。しかし、中島のテキストがこのような野心的な構図のもとで展開されているにも関わらず、これまで初期作品は植民地問題を中心に<sup>2)</sup>論じられることが多く、植民地に向けた視線と日本「内地」への眼差し<sup>4)</sup>の両方を射程に入れた論考はほとんど見られない。

「外地」と「内地」<sup>4)</sup>の両方を視界に入れた興味深い作品として、1929年6月、『短編二つ』という総題のもとで『校友會雜誌』<sup>6)</sup>に發表された『蕨・竹・老人』と『巡查の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ——』<sup>7)</sup>がある。二つの短編のうち、『蕨・竹・老人』は日本の「内地」を、そして『巡查の居る風景』は京城を舞台に描かれており、まさに日本と植民地の両方を眺める構図を見せている。従来、この二編<sup>2)</sup>の関係については、当時『校友會雜誌』の編集に関わった氷上英廣氏の回想<sup>8)</sup>に依據し、『蕨・竹・老人』を「牧歌的な」作品と見て、政治色の強い『巡查の居る風景』を目立たせないための「毒消し」とする見方が主流であった。しかし、『蕨・竹・老人』自体に「軍國主義的の唱歌」を「馬鹿馬鹿しい」と批判する一節など、政治的関心が表面に出る部分が見られ、中島が本気でそれを「毒消し」の目的で發表したとは考えにくい。それに、氷上氏が中島の初期作品に「政治批判的な材料よりもむしろエキゾチシズムとロマンチシズム」<sup>9)</sup>を見ようとしているところから推察すれ

---

1932年の『プールの傍で』、1934年の『虎狩』などがある。

- 3) 『校友會雜誌』第313号、1927年11月。下田に住む一人の女性の戀愛觀を描いた作品である。
- 4) 中島は父の轉勤がきっかけで、1920年9月から1926年4月まで、つまり、小學校5年から中學校卒業までの六年間を京城で過ごした。
- 5) 1927年の『下田の女』、『病氣になった時のこと』、1928年の「喧嘩」など。
- 6) 当時、第一高等學校内で發行されていた雑誌。中島敦の初期習作の多くはこれに發表されている。中島自身その編集に携わった時期もある。
- 7) 便宜上、以下『巡查の居る風景』と記す。
- 8) 氷上英廣氏の回想は次のような内容である。「ついでに覺えているのは、この短編(『蕨・竹・老人』)を私に手渡したとき、かれが「これは毒消しだ」といったことだ。(中略) 当時は、進歩的な學生に對する当局の彈壓がようやく激しくなつたところで、中島は自己の作品のためにそうした進歩的な連中と同一視されるのを迷惑がり、『蕨・竹・老人』のような牧歌的なものと、いわば抱きあわせにして發表したのである。中島は朝鮮を知り、滿州の實情を知っていた。しかしそうした体験は、政治批判的な材料よりもむしろエキゾチシズムとロマンチシズムとして文學的に發酵したのであった。」(初出は「東書高校通信—國語」昭和40年7月。なお、引用はそれを収録した田鍋幸信編『中島敦・光と影』、新有堂、1989年3月、pp.206～207より。)

ば、氏の回想の内容は中島の意図を正確に汲み取ったものというよりは、中島の作品に対する氏自身の理解が先行したもののように思われる。このように考えれば、中島が『短編二つ』として『蕨・竹・老人』を『巡査の居る風景』と一括りにして発表したのは、単なる「毒消し」のためではなく、両作品の意味的な連關を意識した上での措置のように思える。

長年の朝鮮滞在を終えて歸國した中島にとって、植民地を問題化することは、同時に己が現在身を置く日本という場の相対化を要求するものだったのであろう。初期習作を執筆した時点において、彼が日本とアジアの植民地とを如何なる軸のもとで思考し、その中からどのような初期の中島像が映し出されるのか、興味深いところである。本稿では、『蕨・竹・老人』と『巡査の居る風景』との關連性の検討を通して、これらの問題を追究したい。

## 2. <一九二三年>という遠近法<sup>パースペクティブ</sup>

『巡査の居る風景』は、二人の主要人物の身边に起きた出來事を通して植民地京城の現實を暴いた作品である。朝鮮人巡査という身分に揺れる教英と、夫に死なれて娼婦となった東蓮との二本の線に沿って話が進むが、夫の死が震災時の虐殺によるものだと知った東蓮は、その事實を周りに知らせようとして投獄されてしまう。一方、教英も朝鮮人の味方をしたため解雇され、民族の未來を憂えながらも、出口を見出せないまま京城の街をさまよう。

この作品では、「一九二三年」という時間設定が重要な意味を持つと考えられる。

一九二三年。冬が汚なく凍って居た。

凡てが汚なかった。そして汚ない儘に凍りついて居た。殊にS門外の横町ではそれが甚しかった。10)

(p.331)

この一節に明らかなように、繰り返される「汚な」という表現には<一九二三年>への告發が込められている。そして、この引用文の後、「汚な」さが「殊に」「甚しかった」「S門外の横町」—賣春婦の町に主要人物の東蓮が登場し、虐殺による夫の死こそが彼女が賣春婦

9) 註7を参照。

10) テキストは、文庫版『中島敦全集1』(筑摩書房、2000年4月)を使用。このテキストによる場合は引用文の後に頁数のみ記す。なお、下線はすべて筆者による。

に身を落とした理由であることが次第に明かされていく。このように東蓮の悲劇が描かれていく中に、『巡査の居る風景』における〈一九二三年〉は単なる時間設定を越えて、関東大震災時の朝鮮人虐殺で集中的に現れた植民支配という悪を象徴するタームとして機能し始める。そして、東蓮が朝鮮人の巡査によって逮捕されるという設定によって、朝鮮人巡査であるもう一人の主要人物教英との運命の接点が暗示され、〈一九二三年〉の象徴性は作品全体にのしかかるようになる。教英の目を通して点描される植民地の日常も副題が示したように、「一九二三年の一つのスケッチ」となってくるのである。

一方、『蕨・竹・老人』には〈一九二三年〉に関する直接的な言及こそないものの、作品を仔細に読んでいけば、それと深く関連する要素が織り込まれていることが分かる。『蕨・竹・老人』は東京に住んでいた「私」が地方の旅に出るという話であるが、旅に出た理由は東京に言及した冒頭と末尾の二箇所から窺える。

東京の塵と埃との間に長く住んで居た私には、此の土地の和やかな風景が大へん嬉しかったのです。

(p.304)

東京の下宿の二階にかえってから眺められるものは、又しても陰鬱な煤煙と塵埃との空の下に擴がった、ごみごみした汚い家並みでした。

(p.323)

ここにある「煤煙」とは言うまでもなく、近代化の副産物である。この二箇所から、「私」の東京に対する嫌悪がはっきり読み取れる。『蕨・竹・老人』が執筆された1929年頃の東京は、関東大震災後の復興事業によって激しく変貌を遂げていた。この時期の東京について、たとえば、川本三郎氏は次のように述べている。

震災は東京の下町に壊滅的打撃を与えたが、同時に、それは東京再生のきっかけとなった。「震災景氣」「復興景氣」に沸く東京のあちこちで、新しいビルが建ち、道路が作られ、隅田川には清洲橋はじめ近代的な鐵骨橋梁が次々に架けられ、モダン都市東京が出現していった。古い江戸、明治の町並みが破壊されたのにかわって、鐵とコンクリートに象徴される新しい東京が誕生していった。現代の東京の原型は、この時に作られたとっていい。人の心、風俗もかわり、「震災前」と「震災後」では、まったく時代の雰囲気がかわった。だからこそ明治十三年生まれの永井荷風は、江戸以来の古き良き東京を愛惜し、「われは明治の兒ならずや。その文化歴史となりて葬られし時、わが青春の夢もまた消えにけり」(「震災」とうたった。11)

---

11) 川本三郎『林美美子の昭和』、新書館、2003年2月、p.8。

詩情豊かに古き良き東京の喪失を惜しみ嘆いた荷風と同じように、この大きな変動期に遭遇した中島も心の動揺を覺えたと思られる。東京の激変に覺えた違和感は、彼を日本の近代化に對する批判へと向かわせた。そして彼の近代化批判は、上で引用した「汚い」東京の描寫に象徴的に現れている。東京に与えられた「汚い」という形容には二重の意味が含まれていると考えられる。

まず、古き良き日本の伝統が失われたことに對する不満をこの表現から汲み取ることができる。それは單に自然や環境の変化に對してだけではなく、人間と社會の変化をも意識していると思われる。この点は、作品のほかの内容まで視野に入れれば、より明白である。たとえば、川本三郎氏は震災後の東京の変貌を「ムラ社會から都會社會へと發展していく」<sup>12)</sup>過程として捉えているが、『蕨・竹・老人』において「私」はあたかもこの過程を逆に辿るかのように、「都會社會」を離れ、「ムラ社會」に向かつていったのである。ここに、近代化に反發して、古き良き日本を取り戻そうとする作者の姿勢が窺える。また、この作品では「甚さん」という村の老人にスポットライトを当てているが、男手一つで五人の子供を獻身的に育ててきた甚さんは、病人の夫を持つ女性と通じるといふ思わぬ方向へと變つていく。ここにも、倫理觀の崩壊という形で、近代化による良き伝統の喪失というモチーフが表現されていると言えよう<sup>13)</sup>。

「汚い」東京の描寫が持つもう一つの意味は、近代化が生み出した對外擴張的な傾向への批判である。地方の「和やかな風景が大へん嬉しかった」という記述が暗に示したように、日本の<中心>が進める軍國主義的な國策に對して、中島は否定的な態度を取っている。この点は、作品の次の一節を見れば、明らかである。

晴れた或眞晝間に、いつもの様に篠を一本折って藪の中で暴れて居ますと、何處からか樂隊の音が聞えて來るのです。

「煙も見えず、雲もなく」歌は疑いもなくその節なのです。一九一〇年迄に生まれた日本人なら誰でも知って居るに違いない、あの軍國主義の唱歌なのです。

(中略)

「煙も見えず雲もなく……鏡の如き黄海は……」。

私は、竹藪の中に又首を引き込めると、ねころがって、細い葉をすかしてチカチカ光る空を見上げながら、子供のような氣持になってその音を聞いて居ました。……………と、これは又、何と馬鹿馬鹿しいことに、私は何時の間にかその歌を小さな聲で、口の中に繰りかえして居たのです。この馬鹿げた無意味な軍國主義的<sup>マ</sup>の唱歌を……………。

12) 同註12, p.70。

13) なお、この部分は拙稿「中島敦の初期作品に關する一考察—『蕨・竹・老人』を中心に—」(『廣島大學大學院教育研究科紀要』第二部第52号、印刷中)で詳しく論じているため、ここではこれ以上展開しない。

ここにある「勇敢なる水兵」という歌は、近代日本を對外擴張の道に向かわせる追い風となった日清戦争を称揚したものである。「軍國主義的の唱歌」を「馬鹿げた無意味な」ものとして全面的に否定する行爲は、對外擴張を進める近代日本に對する痛烈な批判と見てよからう。

また、ここでも1923年の關東大震災の果たした役割が想起される。震災後の復興事業によって東京が急速に近代都市への変貌を遂げると同時に、震災体験を共有することによって國民の全体意識が強化され、ナショナリズムが台頭するという結果がもたらされたのである<sup>14)</sup>。それによって、軍國主義の傾向が助長されたことは言うまでもない。

このように、「汚い」東京の描寫を切り口に『蕨・竹・老人』を概観してみると、近代化に對する批判が作品の基調となっているのが分かる。そして、伝統喪失と對外擴張との二つの面から日本の近代化の孕む問題が描出されている。興味深いことに、以上で見てきた通り、この二つの問題とも1923年の關東大震災と密接に關係するものである。特に對外擴張への批判は、『巡查の居る風景』における朝鮮人虐殺に對する告發とは表裏一体のものであると言える。このように見れば、表面にこそ出していないものの、『蕨・竹・老人』にも「一九二三年」という潜在的なキーワードがその背景に存在すると考えられる。『巡查の居る風景』が「一九二三年の一つのスケッチ」であれば、『蕨・竹・老人』は「一九二三年」を一つのターニングポイントとした、日本の近代化の一つのスケッチと言えよう。

### 3. 周縁化と<中心志向>

諸岡知徳氏<sup>15)</sup>は、關東大震災時の朝鮮人虐殺を次のように分析した。

人々は自分たちの社會生活の中で不安をかき立てる存在を犠牲として排除することで社會秩序の安定を回復しようと考えたと見えよう。その不安をかき立てたのは朝鮮人や社會主義者であった。(中略) このような朝鮮人に對する不安は人々の無意識的な差別の意識に裏打ちされていたと言えよう。

14) この点については、原田勝正・塩崎文雄編『東京・關東大震災前後』(日本經濟評論社、1997年9月)、成田龍一著『近代都市空間の文化経験』(岩波書店、2003年4月)などに詳しい。

15) 「中島敦『巡查の居る風景』論—『奴ら』/『俺達』の物語」、『甲南大學紀要・文學編』、第115号、1999年、p.25。

朝鮮人虐殺の問題が取り上げられた『巡查の居る風景』では、植民地における差別の現状も重要な描寫対象の一つである。例えば、次は「ヨボ」という差別的な呼び名をめぐる口論を描いた一節である。

しばらくすると、突然其の中から何か言い争う聲が聞えて來た。乗客の視線は一齊に其の方に向けられた。見ると、腰かけて居る粗末な姿をした一人の日本の女と、その前の吊革につかまって居る白い朝鮮服をつけた學生らしい青年が言い合つて居るのであった。

—折角、親切に腰かけなさい、いうてやったのに。—と女は不平そうに言つて居るのだ。

—併し、何だヨボとは。ヨボとは一体何だ、—

—だから、ヨボさんいうてるやないか、

—どっちでも同じことだ。ヨボなんて、

—ヨボなんていやへん。ヨボさんというたんや、

女には何も分からないのだ。

(p.326)

この一幕を目睹した作中人物教英の考えが注目に値する。

教英は又しても憂鬱になつて行つた。何故此の青年はあんな争論をするのだ。此の穩健な抗議者は何故自分が他人であることをそんなに光榮に思うのだ。何故自分が自分であることを恥じねばならないのだ。

(p.327)

このような教英の認識は、逆の角度から日本の嚴しい支配下に置かれた植民地の現實を映し出していると言える。つまり、皇民化政策が進む中で、堂々と朝鮮人としての尊嚴を主張する權利は、すでに日本人の統治者によって奪われていたのである。したがって、この場面において、青年の「ヨボ」という呼び方に對する抗議は、朝鮮人の尊嚴を取り戻すための行爲としては理解されず、「他人」、すなわち日本人として見なされたい氣持の表れとしか理解されない。作品ではまた次のような同様の場面がある。

其の日の午後、府會議員の選舉演説を監視するため、彼は同じ署の高木という日本人の巡查と共に會場である或る幼稚園に出かけたのだ。何人かの内地人候補の演説について、たった一人の鮮人候補の演説が初まつた。商業會議所の頭もやったことのある、内地人の間にも相当人望のある此の候補者は巧みな日本語で自分の抱負を述べ立てて居た。が、その最中に、一番前に居た聴衆の一人が立上つて、「黙れ、ヨボの癖に。」と怒鳴つたのだ。二十にもならぬ位の汚いなりをした小僧であつた。高木巡查はいきなり、其奴の首襟をつかまえて場

外に引ずり出してしまった。と、その時此候補は一段と聲を高くして叫んだのだ。

—私は今、頗る遺憾な言葉を聞きました。併しながら、私は私達も又光榮ある日本人であることを飽く迄信じて居るものであります。

すると忽ち場の一隅から盛んな拍手が起こって來たのだ。

(p.327)

程度の差こそあるが、上に見た二つの場面とも植民地における最も基本的な差別構造—植民者側による被植民者側に對する差別が現れている。いずれも差別される側の強い抵抗が見られたが、それが結局、被差別者を差別する側への同一化に導いているという点に注目したい。勿論、これで被植民者を批判するのは何ら意味がなく、かつ非情である。この点に注目するのは、『蕨・竹・老人』においてと同様の現象が捉えられているからである。

舞台は「内地」に移るが、『蕨・竹・老人』の細部の描寫に目を向ければ、そこにも一種の差別構造が見られる。語り手の「私」は、伊豆の温泉村を汚れた<中心>＝東京の對極に位置するものとして理想化し、贊美している。しかし、現實的には、近代化が遅れた村は周縁化される運命にある。村が周縁化される様子は次の自動車の描寫からも窺える。

此の道(村の中を走る街道—引用者注)を毎日何度か、修善寺から下田に通う自動車が、氣取った警笛を谷々に響かせながら、白い埃を立てて通って行きます。

(p.306)

<近代>のシンボルである自動車の警笛が「氣取」っていると描寫されるところに、近代化の波に一足先に乗った者の誇りと、そうでない者の羨望の氣持ちとが讀み取れる。その自動車が毎日村にやってくるにもかかわらず、ただ「白い埃を立てて通って行」く。ここに顧みられない村の寂しさが克明に表現されている。このように遅れものとして周縁化されていくうちに、村の自己認識に変化が現れてくる。この点は村人の方言意識に見ることができる。

—お光(と呼びすてにして)の方が悪いに決まって居ますよ。きっと甚さんをさそったんですよ。—と(私の前では土地の言葉を使わない)女中はそういつて居ました。

(p.315)

街道まで見に来て居た、宿の女中は土地の言葉を出して、獨り言の様に言っていました。  
—今頃甚さんは泣いてるすら。

(p.317)

上の二箇所を比較すればわかるように、女中は方言と標準語とを意識的に使い分けてい

る。特に東京からやってきた「私」の前で「土地の言葉」を使わないところに注意すると、〈中心〉對〈周縁〉という図式を黙認し、自らのローカル性を敏感に意識する女中の姿が見えてくる。周縁化されることによって、村は〈中心〉に對するコンプレックスを内面に持つようになる。やがてそれは強い〈中心志向〉に轉じ、ついには〈中心〉が歩む軍國主義の道にも追隨するようになるのである。次の村の子供たちが軍歌を演奏する場面を見よう。

みんな、學生服の汚れたのに、金モールで縁をとったのを着て、氣取った歩きつきで、白い埃を蹴立てながら進んできます。太った喇叭吹きは、元氣よく眞赤に頬っぺたをふくらませて、一節が終わる毎に、得意げに合の手を入れながら村にはいって來ました。

(p.319)

この部分の前で、作者はあらかじめ、演奏は「一里ばかり下のY村の俱樂部にたしか今夜当たりかかる活動寫眞の廣告に違いない」と斷っている。その点を考慮に入れると、子供たちが演奏に感じる誇らしさは、映畫という近代的な娯樂の有するモダンなイメージと關係していると思われる。むろん、軍歌自体も、近代化の産物である。子供たちの「得意げ」な演奏ぶりは、映畫と軍歌が象徴する〈近代〉への憧れを感じさせる。それに、「一里ばかり下のY村」という、地理的な位置から言えば村よりさらに周縁であるはずの所が、映畫を上映する俱樂部を有するため、村より上位に立っている。これは、村に對する周縁化が近代化という尺度にしたがって行われているのを物語る。このように、〈近代〉への憧れが、周縁化される者の〈中心志向〉を強め、〈中心〉が遂行しようとする軍國主義、ひいては、植民支配を受け入れる動機となっている。

ここで一度整理すると、以上の考察によって、差別、或は、周縁化が〈中心志向〉を強めてしまうという現象が、『蕨・竹・老人』と『巡査の居る風景』との二編においてともに見られるということが言える。勿論、同じ〈中心志向〉でも、日本「内地」におけるそれと植民地におけるそれとは、發生の経緯と性格とが大きく異なるのは言うまでもない。それに、『巡査の居る風景』にある、〈中心志向〉の危険性を自覺する次のような場面の存在も見逃してはならないであろう。

と、その時だった。彼はある一つの大発見をして愕然として了ったのだ。

一俺は、俺は今知らない中に嬉しくなって居はしなかったか。一と彼はぎよっとしながら自分に尋ねて見た。

一あの日本の紳士に丁寧な扱いを受けたことによって極少しではあるけれども喜ばされて居たのだ。丁度子供が大人に少しでもまじめに相手にされると、すっかり喜んで了うように、俺も今無意識の中に嬉しがって居たのだ……………。

(p.329)

この場面を見れば分かるように、植民地においては民族的アイデンティティーの問題が思考され続ける限り、差別によって生じる〈中心志向〉を打ち壊す可能性が存在する。それに對して、日本の「内地」における〈中心志向〉は無自覺であるがゆえに、より危険である。

『巡査の居る風景』と『蕨・竹・老人』とが同時に發表されることによって、日本の「内地」における〈中心志向〉と植民地におけるそれとが對比され、その結果、「内地」における、近代化の進行につれて強化されていく〈中心志向〉の危険性がより鮮明に浮き上がったと言えよう。

#### 4. 南方への願望

以上では、『巡査の居る風景』と『蕨・竹・老人』の内部における共通性を中心に論じてきたが、ここでは視点を換え、二編に見られる南方願望という問題について検討を試みる。

二つの作品世界をつなげて見ると、二編に登場した京城、東京、伊豆の村、南方の四つの場所が合わせて一つの「帝國日本」像を構成する。興味深いことに、この「帝國日本」像には、北から南に向かって風景が次第に暗いものから明るいものになっていく傾向が見られる。

まず、『巡査の居る風景』にある京城の描寫を見ると、次のようである。

鰐石には凍った猫の死骸が牡蠣の様にへばりついた。其の上を赤い甘栗屋の廣告が風に千切れて狂いながら走った。

(p.324)

『巡査の居る風景』のこの冒頭部分を見れば、1923年の京城が「死」のイメージで描かれているのが分かる。この描寫から、「帝國」日本の「外地」の暗い現實を直視する作者の姿を読むことができる。

續いて、『蕨・竹・老人』における東京の描寫に目を轉じると、京城の「死」のイメージよりは多少明るくなるが、次のような「陰鬱」な風景が特徴的である。

東京の下宿の二階にかえってから眺められるものは、又しても陰鬱な煤煙と塵埃との空の下に擴がった、ごみごみした汚い家並みでした。

(p.323)

東京の「陰鬱」さと「汚」さには、一方では国内で近代化を推し進め、一方では對外擴張を図るという日本の〈中心〉のイメージが重ねられていると考えられる。東京に比べれば、『蕨・竹・老人』における村の描寫は淡色ではあるが、より明るい景色になっている。それを次の一節に見ることができる。

一体此の土地の風景は全て淡色なのです。此の谷の水の色から、うす青い石から、山々の枯れた芝から、竹から、その間にちらちらする櫻から—そう、堇の色迄が此處では、東京あたりに比べてひどくうすい、殆ど空色に近く、その中に、ほんのり紫の靜脈をすかせて居るのです。が、それ等が今日は雨に洗われて俄かに生き生きと鮮やかな色に変わって居ました。

(p.311)

村の風景が東京に比べて一段と明るく描寫されているのは、語り手の「私」が求める古き良き日本の姿があるからであろう。そして、この村の風景よりもはるかに明るいものとして「南方」が、『蕨・竹・老人』の後半に現れている。

翌日、私は南に發ちました。

そして今迄の山の中の淡色とちがって、ひどく色彩の強い風景を—脂ぎった海や、黒綠色に盛り上った島々や、強い日光の中に赤茶けて輝く斷崖や—見ました。

(p.321)

この部分は、語り手の「私」が旅の最後に辿りついた場所に関する記述である。地名も位置も明示されていないが、この「南」の海と島が眺められる場所で、南に向かつての移動に終止符が打たれている。

以上で見てきたような、明るいものを求めて南に向かつていくという傾向は興味深い。作品が執筆された年代を考慮に入れると、「私」が眺めた「南」は、この時新しく日本の版図に加えられた南洋諸島<sup>16)</sup>を暗示しているのではないかと思われる。未だ近代文明に汚染されていない、明るい風景が廣がる南洋や南方に對して、中島敦は生涯、強い興味を示し續けた。彼は唯一の長編小説『光と風と夢』において、サモア諸島で晩年を過ごしたイギリスの作家スティーヴンソンを描き、そして、後にまた自ら南洋諸島に赴く。このような南方への憧れの芽生えを、『巡査の居る風景』と『蕨・竹・老人』の二編を通して發見することができよう。

『蕨・竹・老人』で描かれた南方の海岸の「ひどく色彩の強い風景」と相似するものを、後

16) ドイツ領だった南洋諸島を、1922年に日本が南洋廳を設置して統治を始めた。

の作品における小笠原諸島の描寫に見ることができる。

曾て小笠原に遊んだ時の海の色。熱帯樹の厚い葉の艶。油ぎった眩しい空。原色的な鮮麗な色彩と、燃え上がる光と熱。珍奇な異國のものへの若々しい感興が急に潑刺と動き出した。<sup>17)</sup>

小笠原の「油ぎった眩しい空」、「原色的な鮮麗な色彩」と、南方の海岸の描寫にある「ひどく色彩の強い風景」、「強い日光」とが極めて近似している。だが、南方の海岸の描寫には「異國のものへの若々しい感興」のような心情が現れず、極めて中性的なものとなっている。南へ、南へと、強い南方願望が見られるにもかかわらず、南方の海岸ではその「色彩の強い風景」を眺めるだけに止まったのは、なぜであろうか。

考えて見れば、この時期の南洋は、すでに「帝國日本」治下の「南洋廳」と名を改められていた。『蕨・竹・老人』において、その地名をあえて表記せず、地理的な位置の説明も完全に省略することに、南洋を植民支配下に置く行為に対する中島の抵抗を見ることができよう。また、『蕨・竹・老人』に見られる、南方に憧れを抱きながらも遠くから眺めるだけに止まる「私」の姿も、對外擴張の道を進む当時の〈中心〉の姿勢と一線を畫すものと言えるのではなかろうか。

このように、『巡查の居る風景』と『蕨・竹・老人』とをつなげて見た場合に、初期の中島における南方願望の芽生えが見えてくる。ここで重要なのは、二編を執筆した時点で、中島には南方への願望を自ら抑制する姿勢が見られる点である。この点において、中島は同時に同じく南方願望を抱いた多くの日本人と區別されよう。また、この時期の彼に自己抑制の姿勢を有することが可能であったのは、『巡查の居る風景』で描かれたような、北の植民地の暗い現實を熟知しているからだと考えられるのである。

## 5. 結 び

本稿では、主に時代背景、作品内部における問題提起、作品を外部から眺めた際の構図という三つの側面から、『蕨・竹・老人』と『巡查の居る風景——一九二三年の一つのスケッチー』の関連性を考察してきた。このような考察を経て、次のようなことが指摘できる。

まず、二編から中島が捉えた一つの「帝國日本」像が浮かび上がってくる。具体的に言う

---

17) 1938年の作品『カメレオン日記』の一節。なお、引用は文庫版『中島敦全集』、筑摩書房、1999年10月、p.235より。

と、日本の「内地」では近代化によって美しい伝統が失われていくと同時に、軍國主義の影響が廣まりつつある。一方、日本の「外地」とされたアジアの植民地では、植民地支配による暗い現実がある。そして、日本における〈近代〉の内實を伝統の喪失と欲望の膨張として批判的に捉えたうえで、中島はまたその問題の裏にある無抵抗な民衆の姿を見出している。彼は二編ともにおいて周縁化されて生じる〈中心志向〉の存在を捉え、その危険性を自覚する植民地と、全く無自覚である「内地」とのコントラストを描出している。

これらの点を通して、ひたすら植民地に關心を寄せるというだけではない、初期の中島の新しい一面が見えてくる。それはすなわち、初期作品を執筆した時期に、中島がすでに日本の〈近代〉という思考軸を有していたということである。この一面が明らかになることによって、今後中島における社會性を論じる際により廣い視点からのアプローチが可能となってくる。

さらに、十數年後に中島が植民地用國語教科書の編修の仕事を引き受け、自ら南洋廳の役人となって南洋に赴いた事實を視野に入れれば、二編に見られた南方願望の芽生えは注目に値するものである。特に、南方に中性的な表現しか与えず、感情移入や主觀の介入を控える行爲は、北の植民地の暗い現実を知ってこそ現れた自己抑制の姿勢であると考えられる。それは同時に、〈中心〉が推し進める對外擴張的な近代化に對する抵抗の意思表示としても理解されよう。後年の積極的な南洋行きと比較して考えれば、初期の二編にある南方願望の自己抑制的な表現は、作家中島敦が歩んだ精神的な軌跡を描出する上で見逃せない重要なポイントの一つであると思われる。今後は、南方や南洋に関わるほかの作品をも考察し、この問題についてさらに検討を深めて行きたい。

## 【参考文献】

- ・天野眞美(1994)「中島敦論—『境界』としての『植民地』—」、『早稲田大學大學院教育學研究科紀要』別冊2号、pp.25～38
- ・李英哲(1999)「中島敦『巡査の居る風景—一九二三年の一つのスケッチ』について—『他者』の發見」、『日本文學論叢』第28号、pp.11～24
- ・浦田和義(1992)「中島敦の〈虚構〉—太宰治を視座として」、勝又浩・木村一信編『昭和作家のクロノトポス』所収、双文社出版、pp.220～228
- ・川村湊(2003)「中島敦と朝鮮」、『アジア遊學』51号、pp.130～139
- ・川本三郎(2003)『林芙美子の昭和』、新書館、p.8、p.22、p.42、p.70、pp.147～149
- ・好村富士彦(1962)「中島敦論」、『考えるとは乗り越えることである—好村富士彦遺稿・追悼集』、三元社、pp.210～214
- ・小森陽一(1998)「自己と他者の〈ゆらぎ〉—中島敦の植民地体験」、『〈ゆらぎ〉の日本文學』、日本放送出版協會、pp.227～253
- ・田鍋幸信(1989)『中島敦・光と影』、新有堂、pp.206～207
- ・成田龍一著(2003)『近代都市空間の文化経験』、岩波書店、pp.192～236
- ・南富鎮(1995)「中島敦の初期と朝鮮—その浮遊する朝鮮人像—」、『稿本近代文學』第20卷、pp.79～88
- ・原田勝正・塩崎文雄編(1997)『東京・關東大震災前後』、日本經濟評論社、pp.210～211、p.221
- ・諸岡知徳(1999)「中島敦『巡査の居る風景』論—『奴ら』／『俺達』の物語」、『甲南大學紀要・文學編』第115号、pp.20～31
- ・安野一之(1996)「『巡査の居る風景』序説」、『國學院大學大學院文學研究科論集』、pp.81～89

|     |
|-----|
| 要 旨 |
|-----|

『蕨・竹・老人』と『逡巡の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ——』とが、『短編二つ』という総題のもとで一括りにして発表されたにもかかわらず、これまで二編の関連性に注目した論考はない。本稿では二編を中島敦が当時の所謂「帝國日本」を「外地」と「内地」の両方から捉えようとした野心作として位置づけ、その関連性の考察を通して初期の中島敦像の描出を試みた。

主に時代背景、作品内部における問題提起、作品外部から眺めた際の構図という三つの側面から二編の関連性について考察した結果、日本の〈近代〉という軸の下で、植民地問題のみならず、「内地」における近代化の問題も含めて積極的に思考し続けた初期の中島の姿を捉えることができた。具体的にいえば、この時期の中島は植民地の現実を暴くと同時に、伝統喪失と膨張主義をもたらした日本の近代化を批判し、〈中心〉に抵抗する姿勢を示している。そして、周縁化されることが逆に〈中心志向〉を強め、抵抗の力をなくしてしまうことの危険性を、彼は作品を通して指摘している。その〈中心〉に抵抗する姿勢は、〈南方〉への憧憬を抱きながらも、それを自ら抑制するということでも貫かれたのである。後年の姿勢の変化を視野に入れば、二編から見られたこれらの点は、作家中島が歩んだ精神的な軌跡を描出する上で重要な意味を持つと考えられる。

|   |
|---|
| キーワード：關東大震災、近代化批判、周縁化、中心志向、南方、願望の抑制、中島敦 |
|---|

|                    |
|--------------------|
| 투 고 : 2003. 11. 30 |
|--------------------|

|                      |
|----------------------|
| 2차 심사 : 2003. 12. 19 |
|----------------------|

|                    |
|--------------------|
| 3차 심사 : 2004. 1. 8 |
|--------------------|

住 所 : 日本國廣島縣東廣島市西條下見461-50

電 話 : 0824-21-6402

E-mail : momo7753@hotmail.com